

堀尾吉晴の墓所と石塔についての疑問

はじめに

松江城を築城した堀尾吉晴の名前は、松江開府 400 年と松江城天守国宝指定とを契機に地元松江では知らない人がいないくらいに知名度が上がった。しかし、吉晴の墓所や菩提寺についてほとんどの方は知られないであろう。

筆者は、先年に行われた松江市、安来市、愛知県大口町による堀尾吉晴共同研究会の調査（古文書、堀尾氏ゆかりの城跡、堀尾一族の石塔）に参加し、報告書『近世大名・堀尾吉晴とその一族の石塔』の出版にも関わった。この石塔の調査をとおして、堀尾吉晴をはじめ堀尾一族の墓地や石塔の様子は把握しえたが、一方で堀尾吉晴の墓所や石塔にかかる幾つかの疑問点も生じた。

今回は、「堀尾吉晴の墓所は、なぜ富田城内にあるのか」と、「石塔を生前に、なぜ高野山に建てたのか」の 2 点を取り上げ、その理由と背景について述べてみたい。

1. 堀尾吉晴の墓所は、なぜ富田城内にあるのか

堀尾吉晴は慶長 16 年（1611）年 6 月 17 日に松江で亡くなっている。享年 69 歳。「堀尾古記」（堀尾家重臣の堀尾但馬が記した天正 12 年〔1584〕から正保元年〔1644〕の日記。堀尾氏の動向を知るうえで貴重な史料である。市指定文化財）の慶長 16 年の条には「吉晴様御遠行、6 月 17 日」とだけ記されているが、幕府の記録（「台徳院殿御實紀巻十六」）には「十七日出雲国松江城主堀尾帯刀先生可晴卒す。（中略）齡つもりて六十



【写真 1】堀尾吉晴の石塔（安来市広瀬町）

て松江藩（島根県）主堀尾吉晴、忠氏父子の墓がある。堀尾父子は関ヶ原合戦の戦功により遠江浜松城から出雲・隠岐二ヶ国の太守として出雲の府であった富田城に入城する。その後慶長 12 年（1607）に新たな居城として松江城を築く。忠氏は松江に移る以前に没しており、吉晴がその墓所を選定したものと考えられ、富田城跡の一角に営まれた。吉晴は松江城が完成すると松江に移りその直後に没するが、墓は松江城下ではなく、富田城跡の一角に位置する巖倉寺に営まれた。こうした堀尾氏二代の墓所が富田城跡に営まれたのは、やはり出雲に入国した最初の居城である富田城を強く意識したものであると考えられる。」

ここで、吉晴が「富田城を強く意識した」とあるが、それ以上の説明はないものの、その前段で彦根藩主初代井伊直政の例が挙げられている。直政は関ヶ原の戦い（1600）後、佐和山城（彦根市）を徳川家康から賜ったが、翌年に亡くなった。その墓所（清凉寺）は佐和山城の山麓に設けられ、その

九にて終わりをとりしなり」とあり、老衰による死であったろう。墓所は安来市広瀬町の富田城内に所在する巖倉寺の裏山にあり、石垣基壇の上に総高 3 メートル程の大型の五輪塔が残っている。

慶長 16 年の正月には、松江城天守が完成し、城普請の山場を越えた時期にあたり、富田城下にあった多くの寺院も新しくできた松江の城下町に移転しており、松江城下に墓所を営むのが一般的である。しかし、敢えて元の居城に墓所を設けた理由はなんであったであろうか。

このことについて、これまでに言及されているのは松江城調査研究委員会の中井均氏（滋賀県立大学名誉教授）である。中井氏は「近世大名墓と居城」（『近世大名墓の展開』大名墓研究会編・雄山閣 2018）の中で、次のように述べられている。

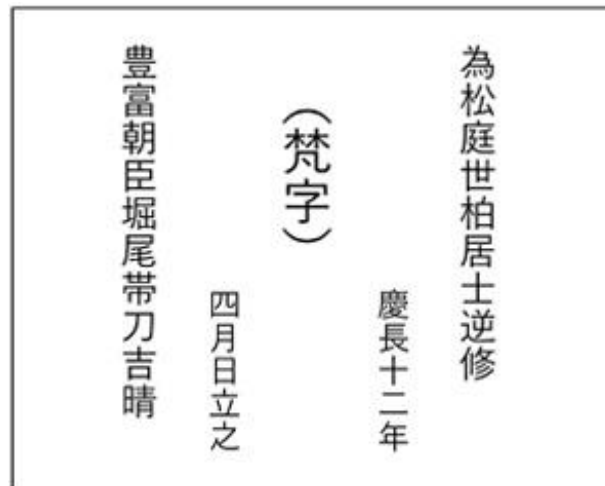
「関ヶ原合戦の戦功により入城した城の周辺に墓所を営んだ事例とし

後、次の彦根藩主直孝は城を東北に近接する彦根山に築くが、墓守寺の清凉寺は佐和山の麓にそのまま据え置かれた。家康から賜った城であり、さらに鬼門方向に位置することも理由として記述されている。

さらに加えるとすれば、松江城が居城になってからも富田城は出雲東部の押さえと、伯耆西部（会見郡・日野郡）からの侵入の備えをもつ城として機能していたのであり、息子忠氏の菩提寺であった中光寺跡（明治初期まで五輪塔が存在していた）と自己の墓所を置くことで富田城を聖地化し、暗に藩主忠晴や家臣に富田城の重要性を伝えたかったと考える。また、富田城が居城であった慶長 8 年（1603）に起こった米子藩騒動（横田内膳の乱）には、吉晴は富田城から鎮圧に米子城（中村一忠の居城）へ出陣している。この時に、富田城が隣国に極めて近く、国境の城としての重要性も痛感したと思われる。

2. 石塔を生前に、なぜ高野山に建てたのか

吉晴は前述のように慶長 16 年に亡くなり、富田城内の巖倉寺境内に埋葬された。現在、確認されている石塔は、他に京都市北区にある妙心寺塔頭寺院の春光院と和歌山県高野町の高野山奥之院にも存在する。春光院の石塔は松江にあったものが、堀尾家が改易された後、親戚の石川家（亀山藩主）により京都に移されたものである。よって、岩倉寺と春光寺の石塔は死後の供養塔になる。



高野山奥之院にある石塔は生前の慶長 12 年（1607）4 月に建てられた五輪塔で、高さ 2.7 メートル程の砂岩製である。地輪（基礎部）は横幅 87 センチ、高さ 63 センチで、正面には梵字（ア）と銘文が彫られている。

【写真 2】堀尾吉晴逆修塔（地輪）の銘文（高野山奥之院）と銘文書きおこし



【写真3】高野山奥之院堀尾家墓所（右から三番目が吉晴の石塔）

松庭世柏居士の下に「逆修」の2文字があり、生前に建てられた逆修塔とわかる。「逆修」とは、生前に逆（あらかじ）め墓石を立て、自己の菩提のための仏事を営む行為を意味する。地藏菩薩經によれば、その効用は自らの来世の往生菩提は追善供養より大きいとされていた（『総合佛教大辞典』による）。しかし、逆修塔は中世から近世にかけてその数は極めて少なく、島根県内での例としては、初代石見銀山奉行大久保長安が立てた石塔が大田市大森町大安寺跡と温泉津町恵コウ寺や愛宕山にある（当初のものではなく、再建されたものが残る）。

堀尾吉晴の場合、慶長12年は息子忠氏の三回忌の翌年にあたり、さらに4月6日には母宗葩（そうは）が亡くなっている。また、松江城築城の初年であり、築城に専念すべき時期であった。このような状況下、高野山奥之院に自己の石塔を設けた背景には、塔頭の龍生院で年3回（正月、5月、9月）の武運長久の祈願（「堀尾吉晴（中略）正五九の月には武運栄久の誓祈乞香華佛餌の資糧を附す」『紀州続風土記：第5輯：高野山部・下』より）と自己の往生菩提の法要をこの年の5月に併せて行った可能性がある。吉晴はその後4年間で、松江城の築城を終えている。天守の祈禱札からすると、慶長16年（1611）の正月には天守を完成させるとともに、二之丸御殿をはじめとする主要な建物群もできあがったと考えられる。そしてその半年後の6月に亡くなっている。

吉晴は、豊臣秀吉のもと幾多の修羅場を潜り抜け、堀尾氏を国持大名にまで押し上げ、最後の仕事として松江城築城と城下町建設を行った。その築城初年の4月、高野山奥之院の墓所へ逆修塔を立てているが、これは堀尾氏の武運長久を願い、自らの菩提往生の仏事も予め営んでおきたかった強い意志の表れではなかったろうか。

おわりにかえて：堀尾家断絶と高野山墓所

吉晴が亡くなってから四半世紀が過ぎた寛永 10 年（1633）6 月 20 日に、孫の藩主忠晴が亡くなる。嗣子なく、堀尾家は断絶した。「堀尾古記」によれば、11 月 3 日に、松江城の堀より内側の武家屋敷から明け渡し、家臣は浪人となった。翌年の 6 月 28 日には堀尾采女や但馬などの重臣 6 人が高野山に参っている。これは龍生院での一周忌法要と堀尾家再興祈念のためと考えられ、さらに同年 10 月 7 日には、但馬他 2 名が再度高野山へ参り、忠晴の石塔を立てている。「堀尾古記」には忠晴のみが記されているが、奥之院には殉死した松村監物の石塔も存在するので 2 基を立てた可能性が高く、両名の追善供養も行ったと思われる。【→堀尾吉晴（後半期）の年譜】

（松江市史松江城部会長／西尾克己／2022 年 10 月 17 日記）